

KAIHO

会報、快報、回報、ニュース

東京工芸大学同窓会 関西支部 会報 平成17年度号 平成17年11月発行

- 1.平成17年度 関西支部新年会
- 2.平成17年度 関西支部総会
- 3.若尾芸術学部長ごあいさつ
- 4.平成16年度 関西支部会計報告
- 5.31期 森澤嘉昭氏
旭目小綬章受章記念祝賀会
- 6.総会返信ハガキ通信欄よりの「メッセージ」
- 7.随想・趣味・おけいこの腕自慢
- 8.会費納入のお願い
- 9.その他

東京工芸大学同窓会関西支部

平成17年度 新年会

平成17年1月29日、関西支部恒例の新年会を「大阪弥生会館」で開催し近畿各地から40余名の同窓生が参加しました。大学からは、本多名誉学長のご出席を頂き、永年関西支部の総会にご出席賜り支部の活性化に大変貢献して頂いた感謝の印として記念品を贈呈させて頂きました。

総会は42期の駕田様の司会で、30期の松本支部長のご挨拶で始まりました。今年の講演は昨年日本のノーベル賞と言われる「日本国際賞」を受賞されました本多名誉学長から、酸化チタン光触媒の理論を大変分かりやすくご講義頂きました。

その理論は、二酸化チタンの電極に光を当てると水を水素と酸素に分解し光触媒として働くことを発見されたものであり、水素というクリーンエネルギーが生産出来ることを示されました。

また、二酸化チタンの強い酸化力を利用し、環境汚染物質、微生物などの分解・除去や汚れ防止の製品として、汚れない建物の外壁タイルやトンネル内の蛍光灯カバー等があり環境浄化に大きく貢献されている事を知り、一同は大変感激しました。

その後、39期の倉橋様による記念撮影があり、懇親会は31期の工藤様の司会進行により23期の上田顧問の音頭で始まりました。懇談の途中には、ビンゴゲームや27期の石川様の見事な手捌きの手品が入り大いに盛り上がりました。

中締め乾杯は38期の滝口様が丁度今日が??歳のお誕生日なので若さ溢れるバイタリティにあやかり滝口様の御発声で今年の新年会も無事終了しました。

(広報委員 エー4期 俣野恒雄記)



東京工芸大学同窓会関西支部 新年会 平成17年1月29日



平成17年度 関西支部総会

平成17年7月2日、関西支部恒例の総会を「アークホテル」で開催し近畿各地から25名の同窓生が参加しました。大学からは、若尾芸術部長のご出席を頂きました。

34期西本議長の名司会のもと、30期松本支部長のご挨拶に始まり各役員活動報告、議案審議に引続き、若尾芸術学部長からは大学の近況報告、在学生作成のプロモーションDVDの上映をして頂きました。

その後、39期倉橋様の記念撮影があり、懇親会は31期工藤様の司会進行で30期貝塚様の乾杯の音頭で始まりました。時間の経つのも忘れ、現役に戻ったように話しも弾み大いに盛り上がり、出席者の最長老であります24期山本様の中締めで来年の「新年会」での再会を約して散会となりました。

(広報委員 エ-16期 小林修一記)



松本支部長 ごあいさつ



東京工芸大学同窓会関西支部 総会 平成17年7月2日



若尾芸術学部長あいさつ



芸術学部の若尾でございます、本日は、お招き頂きましてありがとうございます。同窓会には、いつも色々お世話になっておりまして、大変ありがたく思っております。先日も東京で同窓会長賞と言う賞を設けて頂きました。芸術学部のスターを育てる為の資金としまして、会長賞を運営させて頂きたいと思っております。本当にありがとうございます。

私は今年63歳で、工芸大の芸術学部が出来た時からお世話になっております。工芸大は今年82年目に入りまして、芸術学部の方も12年目に入りました。皆様ご承知かと思いますが、年々受験生が減って再来年になりますと統計上

は、大学の入試定員と受験生が一緒になると言うことで、特に私大にとりましては大変厳しい状況です。工芸大も工と芸と非常にユニークな大学ですが、世の中の状況に合間って苦戦しております。私は、本年度で学部長をやらせて頂いて3年目で、今年で任期は終わります。

工芸大の若い生徒は頑張っています。芸術学部の卒業生は、就職をしてまだ7～8年ですがそろそろ活躍する人、スターが出始めておりますので、その辺は非常に心強いところがございます。

東京工芸大学は、工学部と芸術学部の非常にユニークな大学だと言うことで宣伝をしております。工学部と芸術学部が融合して、何か新しい流れを作れないかと、本多前学長もよく言っておられましたし、今もテーマは続いており模索しておりましたけれど、なかなか現実的なものは難しかったのです。最近では工学部の先生と芸術学部の先生が共同研究をしたり、生徒同士の研究を学校が制度として、予算を組み奨励してやっております。ここ1～2年で、工芸融合の試みの動きが、先生を中心に出てきています。

厚木の方は、工学部及び芸術学部の新しい建物は完了しておりますが、中野にあります芸術学部の方が手狭でして、新しい所に移転が出来たらという気持ちで努力をしておりますが、厳しいと言いますか、そう簡単にはいかない訳で、修理をしています。短大の先輩がご存知のスタジオが、今年震度4が来ると潰れるという調査がきまして、そりゃ大変だということで、今解体改修をしております。

芸術学部は、写真、映像、デザイン、メディアアート表現学科とアニメーション学科の5学科です。アニメーション学科が来年で4年生を迎え、工学部とほぼ同じ2,500名づつ位の生徒数、合計5,000名位になります。最初は、40名程で始まったと聞いておりますので、大変な増え方です。最近では、非常に女性が多くなり、成績も男の方があまり良くなって、女性の方が頑張っている現状でございます。

私はイラストレーターということで、グラフィックデザインとかイラストレーションを教える

デザイン学科に所属しております。私の作品集の中に「女または帰りの歌」と言う、最初の原点と言うべきイラストレーションがあります。今から35年位前私が20代後半に、大学の修了制作の時に自費出版の作品集で、新宿3丁目のあやしい所を徘徊して、その小さなバーのママとの思い出を画集にした非常に生意気な作品です。私にしてはそれが原点で、今もなにか自分で迷ったら、それを見ているようになっております。

イラストレーションは、今やイラストと言う日本語になっておりますが、私の頃は写真と比べると歴史が浅く、イラストレーターになるにはどうしたらいいか大変悩み、1年間ニューヨークに修業に行きました。今イラストレーター志望は沢山いまして、過剰過ぎて大変です。グラフィックデザイナーやプロダクトデザイナーも、就職が東京でも難しくなっております。コンピュータがやってくれることが多くなり、その分プロになる人を困らせています。東京だけではなく地方の方が、今いい仕事が多いように思います。同窓会の皆様方には、受験生のご紹介等も含め工芸大の為によりしく願いをいたしたいと思っております。

芸術学部は、芸術とはついていきますけれど、いわゆる油絵とか日本画というファインアート系ではなく、コンピュータなんかを中心にしたメディアアーティストということで、他の美術系大学とは違います。その違いを特化して打ちださないと、他の美術系大学に負けてしまいます。今後いろんな問題、先程申し上げましたように、工、芸との融合の問題もあります。それから、最近よくコンテンツと言われます。政府が音頭をとって、日本のコンテンツ産業を世界に向けて発信し、文化としてあるいはドルを稼ごうと、ここ2～3年で急に盛り上がっています。日本は、ベースの部分が遅れています。工芸大学の芸術学部は全て、コンテンツ産業になる内容ばかりです。写真、映像、アニメーション、で他の大学とは違うメッセージが送れると私は今思っております。

工芸大学はあまり知らなくて写大で分かるという、ネームバリューが82年の歴史があるのに弱い。今後どう生き延びて行き、しかも新しい何か活力になるような、工芸大学を作らなければいけないということで、新しい戦略を考えていく必要があると私も思っております。情報教育は、非常に流行もあり、ちょっとあぶなっかしい部分もあるんですね。油絵とか彫刻とか日本画というのは、流行とは関係なくアートの世界があります。メディア系は、非常に流行り廃れという部分もありますし、テクノロジーの問題もあります。

写真が出来た時は社会の最先端に行く、写真というものを先取りしてアピールした。工芸大のルーツはそういう所にあるように、とにかく先取りをして行くということにあるように思います。今更ファインアートに行くわけにも行けません。工、芸の融合とそれから新しい一つの分野、コンテンツ系を見ながら新しい工芸大学を作っていくといいかなというふうに思っています。

是非、今後とも大先輩の同窓会の皆様、本当によろしく願いしたいと思っております。

(纏め・広報担当 工-4期 俣野恒雄)

若尾真一郎 芸術学部長のご略歴

1942年 山梨県甲府市生まれ 1969年 東京芸術大学大学院ビジュアルデザイン修了。
1975年 第8回国際ユーモアアートヒエンエンナーレ金賞 イタリア。
1987年 日本グラフィック展年間作家賞。
主な作品は、「女または帰りの歌」[GIGA]など多数。
その他国際展・個展など多数開催。
1993年 東京工芸大学 芸術学部 着任

東京工芸大学同窓会関西支部 会計報告

平成16年度会計報告

H16.6.1~H17.5.31

収入の部		支出の部	
項目	金額	項目	金額
前年度繰越金	10,167	通信費	149,287
支部費	197,000	総会会場支払	222,880
総会費	231,000	交際費	134,336
新年会費	289,000	会議費	103,300
受取利息	1	雑費	81,954
寄贈	30,000	新年会会場支払	232,800
名簿広告費	270,000	次年度繰越金	102,611
合計	1,027,168	合計	1,027,168

平成17年6月22日

会計 倉橋正直



監事 杉本卓也



平成17年度予算案

収入の部		支出の部	
繰り越し金	93,611	通信費	170,000
支部費	200,000	交際費	50,000
名簿広告費	40,000	会議費	60,000
		雑費	80,000
		合計	360,000

会計 倉橋正直

議案審議

- 16年度会計報告と監査報告(上記の通り)
- 17年度活動計画の概要
 - (1)支部会員に17年度総会等の報告書を作成し送付する。
 - (2)「同窓会関西支部名簿」2004年度版を発行する。
 - (3)「新年懇親会」を例年通り催す。(18年1月)
 - (4)次年度総会を平成18年に催す。
 - (5)定例役員会2回開催。(17年11月・18年5月)
- 17年度 収支予算 (上記の通り)
- 規約の改正

第7章 第20条を改正

現行=「本会則は平成16年6月26日に改正し施行する」

改正=「本会則は平成17年7月2日に改正し施行する」

平成17年・総会出席者(26)名

来賓 芸術学部長 若尾真一郎 先生

- (滋賀県) (1名) <敬称略>
- 47期 大西 繁
- (京都府) (4名)
- 24期 山本 吉男 35期 外村 陽二 工8期 小野 昌二
- 29期 山口 晃正
- (大阪府) (12名)
- 30期 貝塚 裕 40期 大泉 秀子 工4期 俣野 恒雄
- 31期 工藤 真 42期 駕田 毅 工4期 黒野 豊治
- 38期 滝口 雅之 工2期 内田 英男 工21期 原 浩一
- 40期 倉橋 正直 工2期 池田 勉 工27期 三橋 浩二
- (兵庫県) (6名)
- 27期 杉本 卓也 30期 福岡 武雄 工16期 小林 修一
- 29期 山口 譲一 30期 松本 一馬 工25期 鈴木正一郎
- (奈良県) (1名)
- 30期 安川 洋平
- (和歌山県) (1名)
- 34期 西本 洋

物故者(平成16年8月~平成17年9月)ご冥福をお祈りします。

17期 宮崎徳夫氏(大阪府) 平成17年9月27日(堺市)

平成17年度・春の叙勲・旭日小綬章、受章に際して



31期 森澤嘉昭

昭和31年に卒業して、来年で50年になります。その間、印刷業界は、新しい技術が生まれ、技術革新が起こっております。弊社の専門分野である文字も、活字、写植タイプ、電子化と目まぐるしく変化し、ますます困難期を迎えております。まさかこのような勢いで文字と画像が一体化になるとは思いもしませんでした。

幸いにして、弊社は、文字一筋にきた会社ですので、時代の変化を捉え、印刷業界中心の電機メーカーと組み、携帯電話、案内広告など幅広く利用されるようになりました。

今後も文字内容の充実等をしていかななくてはいけません、市場ニーズを先取りし、進んでいきたいと思っております。

(株式会社モリサワ代表取締役会長兼社長)

祝賀会開催される



松本支部長 祝辞

森澤会長、この度の旭日小綬章の受賞、本当にお目出度うございます。印刷製版業界としての誇りと同時に私達東京工芸大学の同窓生として大きな誇りです。今日は大勢で森澤会長のお祝いをしようと集まりましたが、これは一重に会長のご人徳のしからしめる処です。会社経営の大任と同時に当業界を超えて関西の企業の振興の為に『大阪府ものづくり振興協会』の会長として東奔西走しておられるお姿を拝見しておりますと、14年前に藍綬褒章を受章なさいました頃と少しも変わらないバイタリティは超人的ですね。森澤会長にはこれからも各業界の牽引車になって頂きたく願っております。又、工芸大学の評議委員、日本印刷機械産業工業会副会長・東京工芸大学同窓会賛助会会長としての評議委員等の大役も、さること乍ら当関西支部印刷部会並びに関西支部に対してもご指導、ご助言をいついつ迄もお願いします。

終わりにになりましたが何卒貴社のご繁栄と会長のご健勝、そして、ここにご列席の皆さまの御発展を祈願しまして、お祝いの乾杯をさせていただきます。《乾杯!!》

平成17年度・春の叙勲・旭日小綬章、受章に際して



司会 16期小笠原氏



森澤会長受章祝賀会 平成17年7月13日

30期 福岡武雄 六十の手習い土に親しむ！

右の写真は、私が所属している“在京阪神・マスコミ人の陶芸「有閑人展」”を明日に備えた会場での写真です。

ところで「有閑人展」て…？この名称、初めて目にされた方が大方かと思いますが、結成してより27年間続いてきている陶芸グループの呼び名です。



マスコミ業界で働く現役と業界に携わってきた人たちが互いに陶芸で交流を図る“焼きもの”好きの集まりで、京阪神間を会場に毎年作品展を開催しており、今年は27回目となります。展示会では、

猛勇の炎の中で土の持ち味をひきだす“自然釉”の焼き物から土と釉薬が絡み合って醸し出す創作に挑んだ焼き物など思い思いの作品が展示されるユニークな陶芸展です。この他に私が所属する陶芸クラブは、放送業界のOB・OGでつくる「関西民放陶芸クラブ」と私が住む地域の「宝塚寿陶会」の二つで、それぞれ懇親・交流を楽しんでいます。

私の陶歴は、未だ10年！ 目下、盛り鉢や皿などの日常雑器が主で「作品」などとはおこがましく駄作の域ですが、それでも飽きずに陶芸に惹かれるのは、形あるものを作る面白さであり、出来具合が思いのままにならない奥の深さです。そしてもう一つは陶芸を通して多くの人たちとの出会いがあるからです。「宝塚寿陶会」の会員は150人おり、新春の集いや窯元見学会、展示会等の催しは活気に溢れ格別の賑わいです。活動はグループに分かれて約40人が毎週教室に集い活動しています。教室ではお互いに作陶の手助けをしたり冗談を交わし合うなどの和気あいあいの雰囲気なので、年々退会者より入会者が多くて教室は満杯…!! 嬉しくもあり悩みの種です。六十歳の手習い！もともとボケ防止、健康維持のために始めたものですが、土に親しむほどに面白くなり程々にのめり込んでいます。陶芸は私の生き甲斐のひとつとして身体の許すかぎり楽しみ精進したいと思っています。



最近の作品

*厚かましくも「趣味・腕自慢」に登場し紙面を汚しましたがお許しのほど願います。なお、先日テレビ番組の中で私の作った「盛り鉢」数点が使用され、テレビを見ながら我れひとり悦に入った思い出がありますので合わせてご紹介します。



テレビ番組は今年6月17日 21:00~23:00放送「写真は番組のビデオ収録からのものです」
金曜エンタテイメント仕置き代理人・鏡俊介の痛快事件簿〈主演 武田鉄矢〉

* 3年前に警官を辞め「居酒屋」を営む鏡俊介(武田鉄矢)が正義感に燃え仲間たちと事件の解決に立ち向かう内容の番組です。



30期 安川洋平 チューリップとの出会い

1990年(平成2年)デュセルドルフ市での第10回ドルッパ展(印刷機材展)見学に、関西写真製版業界の若手15名と4月22日成田を北廻りで出発、3回目のドイツ行と一息ついた頃説明のないまま、成田の滑走路を多数の化学消防車を引きつれ深夜の着陸、代替機の到着迄都内へ、このためロンドン発のツアーがアムステルダム発に、最初に訪れたのがキ

ューケンホフ公園、広大な園内はムスカリの青、チューリップの赤・白・黄色で埋めつくされ、それは見事でしたが、エコノミー疲れで茶店へ、そこで目にしたのが球根売出しのポスター、現物は郵送、植物検疫無し、土産はこれだけと、一番小さな7種各10球、40ドルのセットを申し込みました。この時初めてそれぞれに名前が付いているのを知りました。9月末奈良中央郵局で受取って15年経過、310品種を咲かせアルバムにしてあります。(カメラはマミヤ645・P R O・マクロレンズです)。

ドルッパ展ではこのツアーに参加の39期山本哲氏、出展中の大日本スクリーン(株)の公文哲氏(30期同級生)見学中の31期森沢嘉昭氏の関西支部の同窓生に出会いました。余談ですが、ドルッパ展ではケルンによく泊るのですが、昭和39年7月アグファ研修中ショッピング街でウィンドウを覗いていたら、隣りに奥山滋先生も覗いておられビックリ、ケルン大聖堂を映像や出版物で見るたび思い出されます。

さてチューリップの1年ですが、6月種苗会社の通販カタログ着、8月発注、9月球根着、12月植付、4月開花、6月堀上で一巡です。オランダ王立球根生産者協会1987年版「チューリップの分類と国際登録リスト」には野生・原種系4・園芸種は早生咲2・中生咲2・晩生咲7の計15に分類され、2,400種が登録され、毎年新品种が発表され大半がオランダ産です。新品种は、交配・突然変異がスタートで固定するのに20年かかるそうです。花の小さい原種系は植付けていません。この先500品種には早くも8年、平成25年春の開花ですがどうでしょう。中学生の頃の切手集めを思い出します。

この文を書きながら、カタログの小さな写真を名前の違いだけで発注していますが、種苗会社は正確に識別出来ているのか不安になって来ました。なにしろ現存しないのを入れると8,000種以上あるとされています。



ドルッパ会場正面



キューケンホフ公園



アルバムより



植付

31期 工藤 眞 日々の一言

写真館の仕事の基本は肖像写真にあります。ポートレートはその歴史から見て古くから王侯貴族をはじめ個々の人々の存在を記録し、人生を思い出すべく絵画の手法をもって描かれてきました。

写真術が発明された後はその役割が写真に移行し、時間をかけて作者の感性とテクニックで表現していたものが、ありのままの瞬間を写し取ることになり、撮影機材の進歩による安易さとともにその写し取る瞬間を如何に良いものに演出するかにかかってきます。



私どもの仕事の中でもお互いに言葉で気持ちを伝えることの出来る場合はいいのですが、難しいのは小さなお子さんの場合です。特に赤ちゃんの撮影は、この世に生まれて最初の記念でもあり後々のことを思うと、ご本人はもとより親御さんにとっても最も大切な写真になります。眠っている赤ちゃんの撮影はまず目を覚ませることから始まります。最初は着衣を少し緩め足を涼しくすることで、人間本来持っている頭寒足熱による眠気を覚まし、赤ちゃんの一番感覚の鋭い足裏を刺激しながら足を動かすことで次第に目覚めてきます。そこで一息大きな呼吸をさせるように背中をさすりながら呼びかけるとほとんどの赤ちゃんは目覚めてくれます。もちろんこの様な行為は親御さん以上に愛情こめた気持ちでおこなうよう心がけることが大切だと思います。このことが周りのご家族全員の気持ちを和らげより一層撮影しやすい状況作りに役立ちます。

撮影後お客様から感謝と感激の言葉を頂いたときが撮影者冥利を感じる瞬間です。

まだまだ勉強中まだまだ頑張らなくてはと思っています。

〈(株)工藤写真館社長〉

38期 滝口雅之 桂林の旅



中国広西チワン自治区桂林は典型的なカルスト地形なため景色は奇特奇山奇峰で山水風格は別に一格を持っている。山の型がなんとも言えない、細長く天辺がすべて丸くなっている、大きくなく暖かい型の山、それが無数にある、他所では見かけない型だけに奇山奇峰といわれるのであると思われます。人々はその奇山奇峰に囲まれて生活をしています。朝には多くの人々が川辺で太極拳をし、その背景には朝日でシルエットになった奇山奇峰、昼には農民が水牛に農具を引かせ水田を耕し、その水田の周り

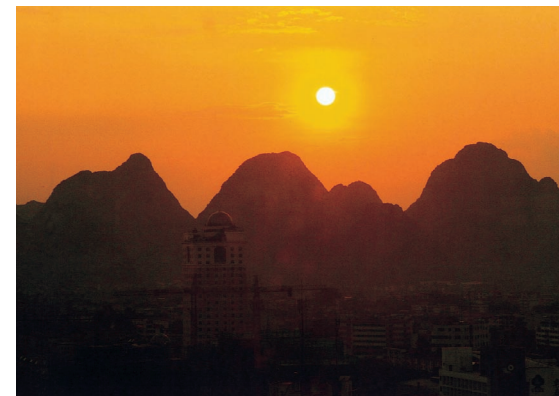
は奇山奇峰、夕暮れには赤く染まった奇山奇峰。

この様に桂林の何処からでも眺められる奇山奇峰ですが、なんとと言っても船での漓江の川くだりではその味わいの深さを体験しました。漓江は桂林山水の重要な部分で、桂林から陽朔に至るまでの20km、約4時間の漓江の川くだりで山水風光が満喫できました。桂林のいたる所から眺められる奇山奇峰ですが漓江の川くだりは水墨山水画の不思議な風景でした。



船は漓江の流れに乗って岩と岩の間を縫うように進み前後左右に奇山奇峰が群れとなって見られました。遠近の山々が重なり微妙に変化し続けやがて視界が開けると湿った空気の中に奇山奇峰は、近くは濃く遠くは薄く、神韻を帯びた階調の美を描き景色は色を失い、無色の階調だけの世界へと変わってゆく。

モノクロ写真が写し出す風景が実際にはこの世に無い風景である様に、階調だけの風景などあり得ないのに……。



船が進むにつれて濃淡の階調だけのモノクロトーンの風景の中に入ってゆく。その非現実感、美しさに感激しカラー写真が全てと言って過言ではない現在、モノクローム写真の難しさと良さを学んだ桂林の旅でした。

〈フォトメイト代表〉

40期 倉橋正直

雑文



終戦の年に生まれ、1月で還暦をむかえ60年、サラリーマンなら定年、これからは退職金、年金等で悠々自適、好きな釣り、ゴルフ等毎日のんびり過したいと思っていましたが、かなしいかな社員もおり三男坊もまだ高校三年生ゆえ、しばらくの間は年中無休の毎日です。

近頃は夜の街への散歩もめっきり少なくなり、ミナミのネオン街からの呼び出しもあまりかからなくなりました。これも60才の年のせいでしょうか。

ミナミの町といえば若い方にはわからないと思いますが、昔は北のユージ(南都雄二)か南のマコト(藤田まこと)と言われ大阪の遊び人の代名詞とされていました。そのころは、宗右衛門町、三ツ寺筋、なかなか風情のある町でした。

北は会社の金で遊び、南は自分の金で遊ぶと言われましたが、近頃のミナミはわけのわからない店がふえ、歩くのさえ嫌になります。ミナミの町で生まれ育った者としては嘆かわしい限りです。このままでは愛するミナミが死んでしまいます。

還暦をむかえこれからは、一年一年を減らし微力ながらミナミの町の再生に務めたいと思います。

ミナミを愛する同志の諸兄の連絡を待つ。

まだまだ楽しく遊びましょう。

〈(株)倉橋写真館社長〉



討報

第17期卒業生 宮崎徳夫様を偲ぶ

27期杉本卓也

関西支部同窓の17期、元ミノルタ千代光会の宮崎徳夫様が、去る9月28日ご家族の見守られるなか、享年86才の生涯を閉じられました。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

私は27期で入社前、秋の六甲山ミルタ撮影会で宮崎様に初めてお会い致しその後29年林教授のお世話でミノルタに入社。宮崎様の職場で数年間試作カメラ・レンズ等の性能テストを実施しご指導を受けました。この実務経験がその後の業務領域で大変役立ちました。宮崎様の業績につきましては、余りにも多くて筆舌し難い処もありますので、写真学会東陽賞受賞時にまとめられた社内報の記事を借用して開示し、若干私の知っている業績を附加させて頂きます。

日本写真機検査協会は昭和29年6月設立されカメラ関係は輸出品の検査からスタートした。その背景にはカメラ業界の生産数が100万台に拡大し海外での品質クレームが一部で発生した事に始まる。当初検査官は各社から選出された訳でミノルタでは宮崎さんに協会から指名があった様であったが、人材確保の為会社の了解が得られなかった。当初のメンバーはニコン、オリンパス、キャノン、コニカ、パロン、他でその中に2名の写専卒業生が加入していた。その後この協会には年々卒業生が入り、終り頃迄に約100名の方々が活躍したと聞いている。

検査基準はそれまでのJIS規格より少し厳しくなった程度であったが、製品の初期段階の物では楽に合格出来るものではなかった。特に新機種物では光漏れに苦労した。

昭和29年頃の社内実績

当時は二眼レフが主体で他社に先がけて実施した事例3件を開示しておく [宮崎様の功績]

1. 二眼レフのボデー内壁は入射光の乱反射が割合多く、これを防止する為塗装面での工夫とか色々実験の結果、防止枠を取付ける事が低コストで実効果のある事を実写で証明する事で実採用に成功した。然しこの方式は後日塗装技術の向上で中止された。ロライフレックスの場合も同じ発想で一時採用していた。
2. レンズ性能を生かしたピント調整。(他社も追従した)当時のレンズは使用ガラスの生産状況よっての制限があり、光学特性の均一化の問題もあって、ガラスのロットが変わる度に修整設計されていた。この事は全レンズでも若干性能が変わってくる。そこで試作レンズの性能テストを行い、ピント調整条件を工場の現場に指示していた。後年は均質化された高

性能ガラスの供給でこの作業は減少した。この場合のピント調整はコリメーターでの0.1～0.15位の調整は熟練を要する訳で非常に難しい作業となる。そこで設定距離の中心部分のチャートを階段式に配列して設置しておけば主標の前後のボケから容易に判定出来る。

3. フィルムの捲取り方式を変える

二眼レフの場合のフィルム送りは、ローライ以来下から上にL字型に捲上げていたがこの方式では放置時間が長いと、どうしても2枚目のピントがフィルムのカーリングの影響によって正確な描写が得られない。色々な実験結果プロニー判で0.3-0.5ミリの差が認められた。この結果は東京の機械試験所でオリンパスは先輩の杉浦氏。ミノルタは宮崎様がメーカを代表して実験結果を発表された。この方式を採用したのがミノルタコードオートマツト以降のレフに採用され、コンシューマレポート等海外でも高い評価を得た。又後年発売されたフジの高級二眼レフにも採用された。

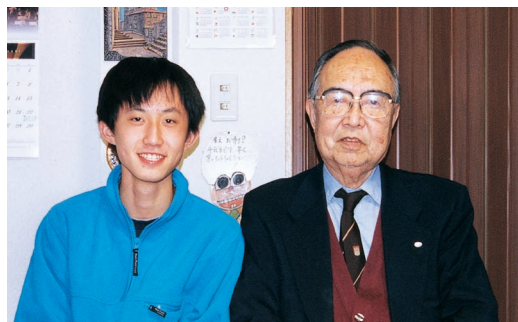
上記2の方式は当時の工場長より感謝状受与された。

その他、レンズのフレア測定工夫等当時としては先進的な課題を求め実施を試みたが、何しろ当時は今の様な測定機がある訳でなく戦中の望遠鏡利用、ガルバノメータでの照度計よりの濃度測定、タイガー計算機の借用位で何とか答を求めて頑張った。私達の部署は研究室でなく検査室であったから余り部署の枠から突出する事は不可能であった。宮崎様の実験の大半は写真測光を基準としての解を求めての実験と実写でもって解決する方策で実施した事が特長でした。平素はとても寡黙な方でしたが、反面大変お心づかいのお人柄に感謝している次第です。

六甲山の出会いから半世紀でのお別れはとて残念で心からご冥福をお祈り申しあげる次第です。

合掌

平成17年10月



生前、自宅にてお孫さんと撮影されたものです。

次のページに功績と経歴を掲載致します。

日本写真学会・東陽賞 宮崎徳夫氏

写真技術、特にカメラ技術の普及と教育に関する貢献

宮崎徳夫氏は東京写真専門学校卒業後、母校の故・林一男教授のもとで約2年間写真教育にたずさわり、昭和19年千代田光学精工(現・ミノルタカメラ(株))入社後も、昭和58年退社までの約40年にわたり、社内において日常業務を通じ、また写真技術教育を担当し、多数の人材を育成する傍ら、神戸山手女子短期大学芸術科写真コースの設置に尽力して同コースの非常勤講師を9年間勤め、大阪市消費者センターの教育啓発講座や堺市立科学教育研究所の写真講座、大阪写真材料商組合講習会など、社会人向けの多数の講習会の講師として、カメラ技術及び写真技術の普及と教育に貢献した。

また、日本写真機工業会・写真機性能試験委員会第3小委員会委員(二眼レフカメラ)、日本写真機検査協会・検査技術委員会専門委員会委員等を歴任、カメラ検査技術の標準化にも努力した。

更に、日本写真学会においては、昭和46年から現在に至るまで、西部支部幹事として支部の運営に貢献し、特に昭和46年4月から48年3月までは常任幹事(現・総務幹事)として支部業務の遂行に当たり、昭和48年には九州産業大学大岩誠一教授との連繋により、福岡における秋季大会をはじめ実現した。これらの業績は、長期にわたる氏の熱意と努力によるものであり、高く評価されるものである。

略歴

昭和16年12月	東京写真専門学校(現・東京工芸大学)理学科卒業
昭和17年11月	同 助手
昭和18年12月	同 助教授
昭和19年 6月	千代田光学精工株式会社(現・ミノルタカメラ株式会社)入社
昭和41年 6月	同 技術部検査課長
昭和44年10月	同 商品試験室長
昭和49年 7月	同 開発部長付次長兼千里研修所教室長
昭和55年 8月	同 嘱託
昭和58年 8月	同 退社

業績

昭和32年 2月	日本写真機工業会・写真機性能試験委員会第3小委員会委員(二眼レフカメラ)
昭和41年 4月	神戸山手女子短期大学芸術科写真コース非常勤講師(9年間)
昭和44年 5月	堺市立科学教育研究所写真講座講師(5年間)
昭和45年 4月	日本写真機検査協会・検査技術委員会専門委員会委員(11年間)
昭和46年 4月	日本写真学会西部支部幹事(現在に至る。48年3月まで常任幹事)
昭和47年 2月	大阪写真材料商組合カメラ講習会講師
昭和48年10月	大阪市消費者センター教育啓発講座写真講師
昭和52年12月	

昭和59年度 日本写真学会東陽賞受賞

その他講演多数

平成17年11月

会員各位

東京工芸大学同窓会
関西支部長 松本一馬

会費納入のお願い

拝啓 時下ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

皆様には、日頃支部運営に何かとご協力を賜り有難うございます。同窓会の活性充実を図るため、会員の皆様には支部活動の状況をお知らせし、一層のご理解を戴く事を念じまして、本年も17年度の会報を制作し、お届け致しました。お目通しの程よろしく申し上げます。

恒例の支部総会そして来る新年会は、会員各位の親睦・情報交換の場として、一層盛大になることを念じております。

つきましては、同窓会関西支部の17年度年会費のご協力をお願いする次第でございます。尚、17年度会費納入済みの方には会費請求の重複ご容赦下さい。

敬 具

記

1. 東京工芸大学同窓会
関西支部 17年度・年会費 3,000円
2. 会費振り込み先 東京工芸大学同窓会・関西支部
口座番号 南郵便局[00940-4-97724]
※ 同封の郵便振替用紙をご利用下さい。
(振込料は無料です)

◇16年度の会費納入者は65名でした。

このままでは支部運営に多大な影響を及ぼします。是非とも1名でも多く会費納入に御協力をお願い致します。

◇お問い合わせは会計担当・倉橋まで Tel 06-6761-6868

会計担当 倉橋正直

